



北京日本学研究中心



日本学研究

二十

學苑出版社



—北京日本学研究中心—

日本学研究

二十

學苑出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本学研究.第20辑/北京日本学研究中心编.—
北京:学苑出版社,2010.9

ISBN 978-7-5077-3641-0

I. ①日… II. ①北… III. ①日本—研究—丛刊
IV. ①K313.07-55

中国版本图书馆CIP数据核字(2010)第187140号

责任编辑:韩继忠

出版发行:学苑出版社

社址:北京市丰台区南方庄2号院1号楼

邮政编码:100079

网 址:www.book001.com

电子信箱:xueyuan@public.bta.net.cn

销售电话:010-67675512、67678944、67601101(邮购)

经 销:新华书店

印 刷 厂:永恒印刷有限公司

开本尺寸:787 x 1092 1/16

印 张:29.75

字 数:600千字

印 数:0001—800册

版 次:2010年9月第1版

印 次:2010年9月第1次印刷

定 价:60.00元

主 编 徐一平 竹内信夫

编委会委员 徐一平 施建军 朱桂荣 张龙妹

潘 蕾 周维宏 畔上和子

执行主编 潘 蕾

まえがき

北京日本学研究センターより『日本学研究』第20号をお届けします。

北京日本学研究センターは、成立25年目を迎え、第二次三ヵ年計画も順調に進んでいます。これまで積み重ねてきた教育方面での成果に加え、研究と図書情報方面での充実も図ることによって、教育・研究・図書情報を三輪としてバランスの取れた、文字通り中国における日本研究の「センター」とすべく地道に努力しております。本号もその成果の一部分です。

本号では、2010年3月までの投稿論文のうち、編集委員会の厳正な査読審査を経て掲載されるに至った各分野の論稿31篇、及び修士課程第22期生の優秀修士論文6篇を掲載しています。長老・中堅研究者の力作のほか、今後の日本学研究を担っていく若手研究者の最新の研究成果も多く寄せられています。読者の皆様のご意見、ご批判をいただければありがたく存じます。

当センターの研究体制は、「日本言語学」、「日本語教育」、「日本文学」、「日本文化」、「日本社会経済」の五つの分野からなっております。前々号・前号・今号と続き、日本社会と日本経済に論及する原稿が少なく、今後「日本社会経済」の分野に関わる研究論文についても投稿していただけますよう期待しております。

北京日本学研究センター

編集委員会

目 录

まえがき	/1
------	----

日本語学

文頭の「場所名詞に」と「場所名詞で」 ——存在文とその周辺の文を中心に	趙 蓉/1
現代日本語における並列構造の語句の研究	玉村禎郎/14
「-かける」の語形とアスペクト的意味	李東哲/23
中国語話者による日本語子音[ɸ]の発音実態 ——北京語話者を中心に	徐一平 張 林/37
「人々」と「人たち」の複数性 ——中国語の“人人”“人们”との対照を兼ねて	譙 燕/45
抽取日语专业词汇的一种量化方法 ——以医学专业词汇为例	施建军/56
未来を表す時間副詞	孙佳音/63
『明六雑誌』から見た明治初期の漢語サ変動詞	邵艶紅/74
コミュニケーションにおける日中の謝罪慣用表現	王 源/86
日本語における「自動的変化事象」の言語化に関する認知言語学的研究 ——中国語との対照を含めて	姚艶玲/96

日本語教育

日本語母語話者の縮約形の使用実態	東会娟/112
越境する子どもがみた「教科・母語・日本語相互育成学習支援」 ——インタビュー分析に基づく事例研究	朱桂榮/123
日本語能力試験の聴解問題に対する分析とそれに基づいた実践	楊 峻/137

映像作品を利用した語用論的技能養成の方法開発に向けて

——映画『しゃべれどもしゃべれども』を通じて……………徐 燕/149

关于英语专业第二外语(日语)学生日语学习观的调查研究

——兼与大学日语公选课学生的比较……………李友敏 张金龙/163

日本文学

「私語」から「虚語」へ

——五山における楊貴妃故事受容の位相……………岩山泰三/182

村上春樹『ノルウェイの森』の〈語り〉が秘匿するもの

——出自としての中産階級・ハツミの特権化……………森本隆子/192

藤原道長の漢籍蒐集……………佐藤道生/206

『和漢兼作集』研究の課題

——漢学ワークショップでの講読を通じて……………山田尚子/212

近世日本の漢文

——小説・笑話・注釈・散文……………堀川貴司/221

《菊花之约》论

——翻案方法与主题……………岳远坤/231

“阶级”阅读视野中《蟹工船》……………郭 勇/238

日本文化

武士道の成立と展開……………笠谷和比古/245

武士道論の系譜……………佐藤鍊太郎/260

平安前・中期の臣諡についての一考察……………潘 蕾/269

元禄赤穂事件から見る武士道の忠……………張玲玲/278

“急進”主義時期における吉田松陰の兵学論

——『孫子評註』を中心として……………唐利国/287

日本文化論の中の「家族」……………張彦麗/298

日本近代女性解放思想的摄取与传播……………肖 霞/308

日语谚语中的鱼文化探析……………彭新勇/318

書 評

另一重视野中的陶晶孙

——评严安生著《陶晶孙 一个丰富坎坷的人生——另一部中国人留学

精神史》……………秦 刚/324

22 期生優秀修士論文

謙讓表現「～(さ)せていただく」の使用実態に関する考察	
——インターネットの検索エンジンによる使用実態調査から	劉曉旭/328
中国における日本語若手教師の同僚性に関する事例研究	楊雅琳/349
谷崎潤一郎『蓼喰ふ虫』論	
——モダニズムから古典回帰への転換	林茜茜/369
吉野作造の社会主義認識	廖 奕/387
女性の就業が男性配偶者に与える影響	
——家事・育児の参加を中心に	何 芳/411
広告から見る資生堂ブランド構築の特徴	
——ブランド構築の結果から検討する	楊 柳/428
『日本学研究』投稿規定	/455
『日本学研究』執筆要領	/456
《日本学研究》征稿启事	/458
《日本学研究》撰稿规范	/459
编者后记	/462
Contents	/463

文頭の「場所名詞に」と「場所名詞で」

——存在文とその周辺の文を中心に

清華大学外国語学部 趙 蓉

摘 要

日本語中の格助詞「に」と「で」虽然备受关注,但至今还留有不少难题。这两者用法有的区别很明确,有的模棱两可,但表达侧面不尽相同。本文以存在句及相关句型句首的「場所名詞に」と「場所名詞で」研究对象,总结两者的用法区别,并试图对这些用法作出根本上的解释。

关键词: 存在句 に格 で格

日本語の文法研究では、格助詞「に」と「で」は新しい研究テーマではない。特に、文中にある与格の「に」と具格の「で」の意味役割はすでに明らかにされている。しかし、文頭にある「場所名詞＋に/で(は)」にはなお面白い現象が残されている。例えば、

○(1)あそこに富士山が見える。

○(1')あそこで富士山が見える。

×(2)あそこには事故があった。

○(2')あそこでは事故があった。

○(3)一部の都市では不動産が急落したとの情報がある。

? (3')一部の都市には不動産が急落したとの情報がある。

上の例で示されたように、「場所名詞＋に/で」には、両方使える場合と、どちらしか使えない場合とがある。本稿では、文頭の二格とデ格の使い分け、また、両方使えるなら、その意味役割の微妙な区別は何なのかを究明してみたい。

1. 先行研究

神尾(1980:61)では、空間的位置の表現である「に」と「で」について、次のような結論が出されている。

①「に」は述語句が必然的にある空間的位置と結びついている場合、あるいはある方向への指向性の意味を含む場合に用いられる助詞である。一方、「で」による位置の指定はしばしば恣意的で、偶然的であって「他の場所もありうるが」という含みを持っている。

②「に」は述語句と直接結びついた位置の指定を行い、「で」は文全体と結びつい

中右(1998:52)では、位置格の「に」と「で」の間には棲み分けの原理が働いていることが明らかになった。「に」は<個体>の位置空間を合図するのに対し、「で」は<状況>の位置空間を合図する。文法的にみると、「に」格の位置表現は典型的に状態・過程・行為の3大基本述語動詞に内在的な項なのに対して、「で」格の位置表現は随意的な付加語である。以上の考えはほぼ神尾(1980)と合致していると言える。このような観点に基づいて、中右氏は局面動詞という概念を導入して、デ格について分析した。

ただ、事態の発生・進展・終結局面を表す局面動詞と共起する「で」格の位置表現だけは、付加語というよりはむしろ、文法項であるとみる十分な理由があった。そしてその延長線上で、実際には局面動詞と共起していない「で」格の位置表現についても、それが概念的な局面動詞の項として解釈される自然な道筋がつけられることをみた。

この観点は非常に意味深いと思われる。筆者の直感としては、道具をあらわすデ格と様態存在文のデ格は文法的必須度が違うと考えているからである。ただ、局面動詞は一体どのようなものを指すのか、局面動詞以外はどうであるかはさらに詳しく検討する必要があると考えられる。

森山(2001:95-106)、(2005:1-11)などはLangackerの動力連鎖原理から出発して、「格助詞のデとニは場所を示すという点では共通しているが、デ格は場所を表す背景格、ニ格はガ格と対峙した参加者をあらわす前景格である点が異なっている」という神尾、菅井と似たような主張をした。この点については筆者は原則としては賛成するが、Langackerの動力連鎖原理はあくまでも英語の他動詞構文からの発想である。しかも、ニ格とデ格が交替できるケースも確かに存在しているので、ニであるから前景化されている、デであるから背景化されているという結論は大雑把すぎるように思う。言い換えれば、文頭のニ格とデ格はくっきり二分するというより連続体として扱ったほうが事実に近いと思われる。

以下では、先行研究の成果に基づいて、存在文及びその周辺の文にある文頭のニ格とデ格の比較研究を行う。

2. 本稿の考察

2.1 モノ・ヒトの存在とコトの存在

日本語の教科書や文法書では、普通存在場所はニ格、動作場所はデ格と解釈されている。ところが、述語が同じく存在を表す「ある」、数量存在を表す「多い」、「少ない」でも、文頭にはニ格とデ格の区別がある。なお、空間的存在を表す言葉は具体的なモノ・ヒトのほうがプロトタイプに近いので、一応ここでは、まず研究対象を具体的な概念に絞ることにする。

(4)この部屋には(×では)椅子がある。

(5)この部屋では(×には)ごご会議がある。

(6)このあたりには(×では)外国人が多い。

(7)このあたりでは(×には)交通事故が多い。

(8)現場には(? では)犯人の残した指紋が多い。

(9)現場では(×には)何が起るかわからないことが多い。

以上の文のように、ガ格名詞(句)の種類により、文頭の形が異なっている。即ち、椅子、外国人、指紋など、具体的なモノ或はヒトがある場所に存在することを語る文では、デ格は使えない。それに対して、ガ格が会議や交通事故などの抽象的なできごとを表す名詞である場合は、文頭では二格は使えない。文としては、どこかで何かが発生したことを表すのである。

ところで、存在出現文は「どこかに何かが出現した」ことを表すのであるから、一応「発生」とも言えるのだが、誤解されないために、ここで、少し説明を加えたいと思う。

(10)あそこに高層ビルができた。

(11)お腹に赤ちゃんができた。

(12)あそこで交通事故があった。

上の例で示されたように、存在出現文では、ガ格は空間存在文と同じで、存在物はモノかヒトである。もちろん、存在出現文では、「YがZ」全体がコトになるが、コト存在文はガ格自身がコトであり、「YがZ」がコトの存在を語るのである。両方とも、コトと言っても、内実も異なっているし、文頭の形も違うのである。

存在文では、ガ格が具体的なモノ・ヒトである場合は、普通は文頭が二格でなければならないが、次のような知覚存在文では、やや微妙である。

○(13)あそこに富士山が見える。

○(13')あそこで富士山が見える。

○(14)いたるところに蜂の羽音が聞こえる。

○(14')いたるところで蜂の羽音が聞こえる。

このような知覚存在文では、二もデも使えるが、「に」のほうはガ格の「富士山」、「蜂の羽音」が「あそこに存在する」という意味になるが、「で」のほうは、「(富士山が)見える」、「(蜂の羽音)が聞こえる」という動作が「あそこ」、「いたるところ」で発生することになる。

つまり、デ格がどの部分とかわかるかはともかく、二格は動詞、認識主体の見る場所ではなく、富士山の位置を表すのである。それで、神尾の2点目の結論——「に」は述語句と直接結びついた位置の指定を行い、「で」は文全体と結びついて述語句の表す動作、出来事、事態などの生ずる背景となる場所を指定する——は少なくとも場所を表す二格、デ格では適用できないのである。

以上、具体的な概念に焦点を当てて見てきたが、抽象的な概念になると、二格とデ格の区別はほぼないものも多いようである。例えば、本稿で集めた新聞社説の中では、次のような例文が見られる。

(15)自民党内には一般財源化に強い異論がある。(日経新聞 2008. 4. 1)

- (16)国内では、自衛隊派遣への異論もあった。(読売新聞 2008. 9. 13)
- (17)EPAをめぐるのは韓国内に慎重論もある。(日経新聞社説 2008. 4. 22)
- (18)民主党内では、自衛隊の海外派遣や消費税率引き上げなどについて積極論と慎重論がある。(読売新聞社説 2008. 7. 19)
- (19)野党の中にも、以前の制度がよいとは思わないという声がある。(朝日新聞社説 2008. 5. 22)
- (20)民主党内では、政府案に反対が大勢だが、何もしないよりは政府案を成立させた方がいいとの声もある。(朝日新聞社説 2008. 5. 21)
- (21)ロシアには日本がいずれ四島返還の要求をあきらめるだろうとの見方もあるといわれる。(日経新聞社説 2008. 4. 28)
- (22)ロシアでは日本がいずれ四島返還の要求をあきらめるだろうとの見方もあるといわれる。
- (23)とかく官僚寄りの自民党内にも、政権浮揚のために改革を進めるべきだとの勢力がある。(朝日新聞社説 2008. 5. 21)
- (24)とかく官僚寄りの自民党内でも、政権浮揚のために改革を進めるべきだとの勢力がある。
- (25)日本国内でも、超党派の国会議員でつくる「日本会議国会議員懇談会」(会長・平沼赳夫元経済産業相)が、「チベットの混乱が続く場合、福田首相の北京五輪開会式欠席をも考慮すべきである」とする決議を採択するなどの動きがある。(朝日新聞記事 2008. 5. 2)
- (26)日本国内にも、超党派の国会議員でつくる「日本会議国会議員懇談会」(会長・平沼赳夫元経済産業相)が、「チベットの混乱が続く場合、福田首相の北京五輪開会式欠席をも考慮すべきである」とする決議を採択するなどの動きがある。
- (27)中山氏の辞任を受けて、与党内では野党が求める衆参両院の予算委員会審議を拒否し、できるだけ早く解散・総選挙にうって出るべきだとの意見が強まっている。(朝日新聞社説 2008. 9. 29.)
- (28)自民党の一部などに、北方領土とともに竹島の領有権問題をもっと学校で教えるべきだ、とする声が強まっていた。(朝日新聞社説 2008. 7. 15)
- (29)中国人の間では、冷静に日中関係を見守ってきた人々の中でも支持する意見が強い。(東京新聞 2008. 5. 4.)
- (30)中国人の間には、冷静に日中関係を見守ってきた人々の中でも支持する意見が強い。

以上あげた文の文頭は、国(都市)の名前、組織の名前などであり、いずれも抽象的な場所名詞である。このような抽象的な場所名詞は「机の上」、「あそこ」などのような典型的な空間場所より場所性が弱くなる一方、限定範囲の意を帯びるようになった。一方、ガ格的慎重論、声、見方、動きのような抽象的名詞も、コトであるかモノであるか、判断しにくい一面がある。要するに、具体的な名詞の場合は二格とデ格的

意味の相違はかなりあきらかだったが、徐々に抽象化してくると、その境界線ははっきりしなくなると言えるのではないだろうか。

一方、例(31)のようなデ格が二つの文の総限定になる文で、文頭では二格が使いにくい。つまり、デ格の後続部分の構造が複雑である場合は、デ格しか使えなく、より明瞭な場合は二格もデ格も使える、という傾向があるのである。

○(31)欧米では昨年、政府機関に対するハッカー事件が相次ぎ、中国軍の関与を指摘する見方もあった。(読売新聞 2008. 9. 14)

? (32)欧米には昨年、政府機関に対するハッカー事件が相次ぎ、中国軍の関与を指摘する見方もあった。

2.2 存在場所と限定範囲

存在場所と動作場所のほかに、存在場所は二格、限定範囲はデ格であるという主張がある。例えば、

(33)うちのクラスには(×では)、韓国人留学生が6人いる。

(34)うちのクラスでは(×には)、高橋さんが成績が一番いい。

(35)日本には(○では)、握手という習慣がない。

(36)日本では(×には)、握手はあまり一般的ではない。

(37)被災地には(○では)死傷者がかなりいる。

(38)被災地では(×には)テントの不足が深刻だ。

上の文では、例(33)は述語が「いる」だから、「うちのクラス」は存在場所とされ、例(34)は「一番」という程度を表す副詞があるから、成績比較の限定範囲とされるだろう。それはまずそれで間違いないと認めたい。だが、詳しく考えてみると、このいわゆる、存在場所と限定範囲という用語では、二格とデ格の特徴を充分まとめられるかどうか、と疑われる。そもそも、韓国人留学生も高橋さんもうちのクラスにいるのである。また、デハ文にも、必ずしも、「一番」、「とりわけ」、「なにより」のような修飾がなければならないというわけでもないようである。

それで、限定範囲のかわりに、筆者は例(34)、(36)、(38)のような「場所名詞+で」に対して、次のようなまとめを主張したい。デ格は後続する解釈・叙述に関する場所的限定である。つまり、二格とデ格は存在する場所の限定と解釈・叙述に関する場所的限定の関係にあるのである。

ただ、以上の主張に三点補足したい。まず、次の例文を見てみよう。

(39)日本には美しい海岸があります。その中でも沖縄の海ほど美しい海がありません。

(40)日本では、沖縄の海ほど美しい海がありません。

例(39)の前半は典型的な存在文であるが、後半は「美しい海がありません」という存在の否定を語るものの、文頭の「その中」にデ格が使われている。というのは、「その中」はもともと空間的表現であるが、ここでは、「日本の海岸」という複数概念、つまり限定範囲を表すのである。しかも、「沖縄の海ほど……ない」は限定範囲内の最

高級を語っているのである。それで、文としては「沖縄の海より美しい海の非存在」を語ると同時に、「日本の海岸では沖縄の海が一番美しい」という状況解釈をするのであると理解すればよい。そこで、存在を語ると同時に、限定範囲内の比較をも表す場合は、文頭の格助詞は限定範囲のデ格が優先されると言えよう。

二点目になるが、後続の部分が存在を表す場合は文頭の場所名詞にはニが使われるが、次のような文にある「日本」は場所名詞である。述語も存在を語るものであるのに、文頭に格助詞デが使われるのはなぜだろう。

(41)日本では(? には)精製設備に余裕がある。(単純存在文・日経新聞社説 2008. 5. 18)

(41')日本に(? では)技術の余裕がある。

(41'')精製設備に(× では)余裕がある。

例(41')、(41'')は、どちらも文頭にはニ格が使われているが、例(41)の文頭はデ格でないと、不自然のようである。母語話者の語感では、二つのニ格が連続すると、変に感じるようであり、それは納得できる。もっとも、例(41')と例(41'')はニ格の後ろで単なる存在を語っているが、例(41)では、後続部分は「精製設備に何かが存在する」という存在に関する解釈をしている。

三点目は数量存在文についてである。

○(42)本棚には本が多くない。

×(42')本棚では本が多くない。

○(43)冷蔵庫の中には残ったおかずが多い。

×(43')冷蔵庫の中では残ったおかずが多い。

○(44)外大には女の子が多い。

?? (44')外大では女の子が多い。

○(45)政府機関には男の人が多い。

○(45')政府機関では男の人が多い。

○(46)北欧やアジア諸国には女性大統領や首相が珍しくない。

○(46')北欧やアジア諸国では女性大統領や首相が珍しくない。

以上の文は文頭のデ格の適格性が下に行くほど高くなる。数量存在文の典型性は例(42)、(43)が一番高い。見てみると、「本棚」、「冷蔵庫の中」は目の前にある範囲の狭い場所であって、北欧やアジア諸国のような抽象的場所より範囲の広い場所である。目の前にある場所は前景化されやすく、数量存在の限定になりにくいようである。ここでは、場所名詞は範囲が大きいほど、抽象化していくほど、デ格の適格性が高くなると考えられる。

ところで、次のような文はどうだろう。

○(47)宇宙には名の知らない惑星が多い。

×(47')宇宙では名の知らない惑星が多い。

○(48)世の中には品格のいい人が多い。

×(48')世の中では品格のいい人が多い。

「宇宙」、「世の中」のような場所名詞は範囲が非常に広いが、デ格が非適格なのはなぜだろう。それは「宇宙に名の知らない惑星が多い」ことと「世の中に品格のいい人が多い」ことは一般に認められる恒常的な事実であるからであろう。「名の知らない惑星が多い」と「品格のいい人が多い」とは「宇宙」や「世の中」に対する説明ではなく、単なる存在の叙述である。つまり、

(49) 政府機関では男の人が多い。(前出例 45' と同じ)

(50) 北欧やアジア諸国では女性大統領や首相が珍しくない。(前出例 46' と同じ)

のような説明に関連する文では、どうしても「ほかの働き先では男の人が必ずしも多くない」、「日本では女性の首脳が非常に珍しい」のような事情が潜在するが、「宇宙」や「世の中」には対比となる対象が存在しない。よって、説明の意味合いが弱くなったのではないかと考えられる。

2.3 述語がシテイルである場合

後続部分が「Yがしている」のとき、文頭に二格しか使えないものと二格とデ格が両方使えるものがある。その上、両方使えるものにはまた、意味が全く違うものと、意味が似ているが、語る重点が違うものがある。以上の理由から、ここでは、「場所名詞に/で(は)Yがしている」の形をとっている文に関して検討したい。

まず、基本的に、具体的な動作を表す場合には、二格が使えない。例えば、

○(51) 大隈講堂で胡錦濤主席が講演をしている。

×(51') 大隈講堂に胡錦濤主席が講演をしている。

○(52) 専用教室では日本語学科の学生が議論している。

×(52') 専用教室には日本語学科の学生が議論している。

本稿では、デ格は運動で、二格は状態であるという従来の観点到に反対しているが、典型的な動作に二格が使えないことを否定するわけではない。この点に関しては、事実に問題がないようなので、ここでは具体的な議論をしないことにする。

A) 二格が使えるが、デ格が使えないもの

○(53) 壁に絵がかかっている。

×(53') 壁で絵がかかっている。

○(54) 机の上に本が並んでいる。

×(54') 机の上で本が並んでいる。

○(55) 病室に医者が来ている。

×(55') 病室で医者が来ている。

○(56) ハルバ嶺には旧日本軍の遺留化学兵器が埋まっている。

×(56') ハルバ嶺では旧日本軍の遺留化学兵器が埋まっている。

以上のような二格が具体的な場所、ガ格が具体的な存在物・人である例文では、二格はいずれもデ格と交替することができない。「壁」、「机の上」、「病室」、「ハルバ

嶺」はそれぞれ「絵」、「本」、「医者」、「化学兵器」の存在場所であるが、述語動詞とも関わっている。即ち、動詞の「かける」、「並べる」、「来る」、「埋める」には場所を表す二格が必要である。例(53)、(54)、(55)、(56)はそれぞれ「絵を壁にかける」、「本を机の上に並べる」、「医者が病室に来る」、「化学兵器をハルバ嶺に埋める」の結果状態である。このような文では、二格は存在場所を表すと同時に、動作方向という指向性も持っているのである。このように、二格は指向性をも持っているから、デ格が使えない。

ところで、二格、デ格の適格性はともかく、二格には指向性があり、デ格には指向性がないことを次の文により証明されたい。

○(57)ファミレス各社には中国産食材を使っているかどうかの問い合わせが相次いでいる。(読売新聞 2008. 3. 24)

○(57')ファミレス各社では中国産食材を使っているかどうかの問い合わせが相次いでいる。

○(58)中国政府の調査によると、三鹿には昨年 12 月から粉ミルクが原因で乳幼児が発病したとの訴えが相次いでいたが、問題が表面化したのは今月になってからだ。(日経新聞 2008. 9. 26)

○(58')中国政府の調査によると、三鹿では昨年 12 月から粉ミルクが原因で乳幼児が発病したとの訴えが相次いでいたが、問題が表面化したのは今月になってからだ。

○(59)金融引き締めや人民元の上昇、人件費の高騰などが響き、広東省や山東省といった輸出加工産業の拠点では中小企業の倒産が相次いでいた。(日経新聞 2008. 9. 20)

×(59')金融引き締めや人民元の上昇、人件費の高騰などが響き、広東省や山東省といった輸出加工産業の拠点には中小企業の倒産が相次いでいた。

以上の例文では、「○○が相次いでいた」は同様であるが、例(57)～(58')までの「ファミレス各社」と「三鹿」は「問い合わせ」と「訴え」が相次いで出来る場所でもあり、「相次いでいた」の着点でもある。しかも、このような文における指向性は「壁に絵がかかっている」のような文と似ていると言える。それに対して、例(59)の「輸出加工産業の拠点」は「中小企業の倒産」ということの発生する場所にしかない。というのは、「倒産が相次ぐ」というコトと「輸出加工産業の拠点」との間に指向性がないからだと考えられる。また、シテイル文からやや外れるが、次の例も実は原理的に同様である。

(60)北朝鮮には、国際金融機関から貸し付けや技術支援を受ける道が開かれる。(読売新聞社説 2008. 6. 25)

(61)北海道では、サミットが開かれた。

上の例文では、二格名詞の「北朝鮮」、「北海道」はともに地名で、場所を表すのであり、述語動詞はいずれも「開かれる」である。ところが、例(60)は「北朝鮮にとって、○○道が開かれる」ことを表すのであり、「北朝鮮」は場所というよりも(広義的)